

目指す学校像	輝く笑顔 学ぶ意欲あふれる学校
--------	-----------------

重点目標	1 ICTを最大限活用したデジタルの優位性と「協働」を組み合わせた教育への理解と実践 2 教職員・児童それぞれの危機管理(回避)能力を素地とした安心安全な学校づくり 3 学校・家庭・地域が目標やビジョンを共有し、連携・協働するスクール・コミュニティの構築 4 教職員がアイデアを出し合い、新たな学びのスタイルに向け挑戦し続ける校内体制の創造
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学 校 自 己 評 価			年 度 評 価		学校運営協議会による評価
年 度		目 標			年 度 評 価		実施日令和7年2月13日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	〈現状〉 ○全国学調では、国語、算数ともに全国、県・市平均と比べ低い結果である。 ○市学調では、3～6年の全学年、全ての教科において市平均を3ポイント以上下回っている。 ○市学調では、学習への関心・意欲・態度に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べ大差はない。 ○タブレット端末を器用に操り、学習課題の解決に向けた調べ学習やまとめに主体的に活動する児童が多い。 〈課題〉 ○全国学調の結果分析から、国語では「言葉の特徴や使い方に関する事項」、回答形式では記述式に弱いことが分かった。算数では、「データの活用」、回答形式では短答式に弱いことが分かった。市学調でも同様の傾向にある。 ○ICTを最大限に活用したデジタルの優位性を生かした活動と多くの人のつながりを感じる体験や交流等の協働作業を組み合わせた授業を児童主体で展開していく必要がある。	・ICTを最大限に活用した、「個別最適な学び」への理解と実践 ・多様な他者との体験や交流がある「協働的な学び」の実践	①ICTを駆使して、主体的に学ぶ授業の中核に位置付け、児童自らが学びをデザインできるように教師が意図的に仕掛けを用意する。 ②教職員研修を自主研修とし、「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」への理解と実践力を高める体系的な研修を推進委員会主導で実施する。 ③教える側主体から学ぶ側主体へと授業を改革し、毎日ICTを活用し一人ひとりの状況に応じた「個別最適な学び」を提供する。	①児童アンケート「ICTを活用した授業は楽しく分かりやすいか。」の項目において肯定的な回答をする児童の割合が90%以上になったか。 ②学校課題研究の振り返りで「理解が深まり授業スキルが身に付いたか」において肯定的な回答が90%以上となったか。 ③教職員アンケート「児童が毎日ICTを活用し、自ら調べ、学習する環境を整備したか。」において肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	○アンケート結果では、ほぼ100%の児童が楽しいと回答しているものの、学習理解が高まるといった相乗効果は得られていない。 ○自主研修を通じて、自らの指導を見つめ直すことができたようである。また、他の教員の実践から学ぶ研修を同時に行ったことで、新規の指導スタイルを学ぶことができた。 ○低学年におけるICTの使用頻度は確実に向上している一方、読む・書くなどの基礎を取得する必要があることから、十分なウェイトとは言えない。中・高学年はクリアできた。	B	(課題) (1) 児童の学力を底上げする必要がある。 (2) ICTやAIを活用した授業スキルを一層高めていく必要がある。 (改善策) (1) タブレット端末の活用に加えて、アナログ(読み書き計算)の学びに地道に取り組む時間を確保する。 (2) 学校課題研修として、ICTやAIについて学ぶ機会を創出する。
2	〈現状〉 ○児童とその保護者に寄り添い、信頼関係の構築・発展を図るとともに、継続的な観察やアンケート等を活用し、児童理解に努めている。 ○施設整備の不具合が認められた場合、児童の安全確保への措置を速やかに行き、市教委と連携し対応している。 〈課題〉 ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、迅速かつ適切に、全教職員が同一歩調で組織的に対応する体制が必要である。 ○教職員による安全点検を確実に行うだけでなく、児童自らが日々の生活を振り返り、安全に対する意識を高めていく必要がある。	・いじめ、差別を許さない児童一人ひとりが安心安全を感じる環境づくり ・教職員・児童の危機管理(回避)能力の向上	①教職員間の対話を活性化させる時間を放課後に確保するとともに、毎週月曜日の職集で生徒指導、教育相談に関する情報共有の場を設定する。 ②アンケート等の結果や面談等を通じて、児童の心の状態を把握し、専門職や保護者を巻き込んだ迅速かつ適切な支援を行う。	①教職員間の情報共有が活性化し、生徒指導、教育相談に係る攻めの具体策を立て、同一月内で対応できたか。 ②アンケート等の結果を学校全体で共有し、関係分掌を中心にSCやSSW、関係機関等、保護者と連携し具体策を講じたか。	○いじめの未然防止については成果が上がっている。認知件数は他校と比べると少ないが、初期対応から見守りまでの流れがスムーズに行われている。 ○生徒指導、教育相談、特別支援分野において、専門職が効果的に機能し、児童やその保護者との連携が適切に図られている。また、教職員間の情報共有も十分にできている。	A	(課題) ・いじめの定義について、より深く理解し、認知への意識を変えていく必要がある。 (改善策) ・いじめの認知をこれまで以上に積極的に行うよう、研修を実施する。
3	〈現状〉 ○登下校の見守り、読み聞かせ、おやじの会、自治会や育成会、PTAの支援を受け、学校と地域が一体となった活動が定着しつつある。 ○学校だよりやHP等を活用して教育活動を広く地域に広報するとともに、授業参観や各集会、学校行事等を積極的に公開している。 〈課題〉 ○学校運営協議会においてSNN等地域の教育力を活かした活動(行事)の実現に向けた熟議を重ね、積極的に行動していく必要がある。	・学校運営協議会とSSN等が連動し、学校と地域一体感ある取組の充実 ・学校や地域の行事を通じて、互いがつながり合い、共に成長する機会の拡充	①学校運営協議会やSSNの取組に関する情報を学校だよりや学校HPで発信するなど、広く広報活動を行う。 ②学校地域連携コーディネーターが地域等との連絡調整役となり、協働のある取組を実施する。	①学校HPの更新を毎月実施し、学校と地域の協働に関する実績を保護者や地域に広く広報する。 ②学校運営協議会での熟議で出された話題を地域に発信し、協働して取り組むコミュニティを構築する。	○学校HPの更新には課題が残った。普段から目にするものではないため、他の方策についても協議を重ねておくべきであった。 ○コーディネーターの果たすべき役割は概ね達成できた。連携も順調である。	B	(課題・解決策) ・学校運営協議会の実施については、計画通りであったが、その内容を地域等に発信できなかった。 *アプリ等を活用し、周知していく。
4	〈現状〉 ○特別の教科「道徳」の研究の成果として児童の自己存在感、自己有用感を高める教育活動が定着している。 ○長期欠席児童へは、専門職や保護者との連携、オンライン授業や「SoIa(ソラ)るーむ」の運用等を通じて教育機会の確保に努めている。 〈課題〉 ○教員がこれからの教育の方向性を見通し、失敗を恐れず新たな学びのスタイルに積極的に挑戦し続ける必要がある。	・全教職員がアイデアを出し合い、新しい学びのスタイルに向かって挑戦し続ける意識の向上	①ICTの効果的活用やアクティブ・ラーニング型授業の実践つながる自主研修を毎月1回以上行う。 ②可能な限り他学級の授業参観や他校の教育実践を参観し、教育のトレンドについての意見を広めていく。 ③国の動向や本市の目指す教育に関する情報を教員にリアルタイムで提供することで、新たな学びに挑戦する意識を高める。	①市教委と連携し理論を学ぶ研修を行うことで、教員が日々の実践に役立つスキルを習得し、授業実践への意欲につながったか。 ②全ての教員が自らの目標に向け授業改善に取り組み、校内でその成果を報告・共有することができたか。 ③市教委や新聞の切り抜きを教職員に情報提供することで、本市の目指す教育を実践することができたか。	○ICTの活用をはじめ、市教委の示す教育施策を日々の教育活動に反映するなど、教員の意識に変容が見られる。今後も本スタイルを本校において推奨していきたい。 ○学期に1回程度、研修の成果を発表する機会を設けた。教員の反応として、〇〇教諭の授業が参考になったとの感想が出ている。 ○月に1～2回のペースで情報提供を行った。他校の教員が知らない情報も本校教職員は知っているケースが増えている。	B	(課題) (1) 本市の教育施策に取り組む際には、軽重を付けて実施する必要がある。 (2) 教員一人ひとりが、アクティブ・ラーニング実践への意識を高くもち、実践を重ねていく必要がある。 (解決策) ・教育施策や指導法について学ぶ研修を計画的に実施していく。

研修の機会を積極的に設定したり教育情報の発信を行ったりして、教職員の資質向上に努めている。次年度に向けて課題を十分に把握し、研修を計画的に実施していただきたい。

